

巻 頭 言

高知女子大学看護学会長

野 嶋 佐由美

看護学は、地域の課題に真摯に向き合い、多職種と協働して着実に変化を創出している学問であり、未来に向けて可能性のある学問であることを痛感しています。

緊急の課題である災害や持続可能な開発目標（SDGs）に対しても看護学が取り組むべき課題はたくさんあります。高知女子大学は南海地震の真最中に開学したという歴史もあり、大学としても、看護学部としても災害に関する教育、研究、地域社会活動に力を注いでいます。

去る12月15日（日）には、池キャンパスに隣接する基幹災害拠点病院である高知医療センターとの合同災害訓練を実施しました。大規模災害の発生時に、高知医療センターが基幹災害拠点病院としての機能を十分に果たすことができるように、高知県立大学に救護所および避難所を設置します。救護所では、看護学部・看護学研究科が中心となり、高知医療センターから派遣された医療スタッフも加え、協働して軽症者の対応をします。また、社会福祉学部が中心となって避難所運営を、健康栄養学部が中心となって食料等対応の訓練も行っています。訓練には、地域の町内会の方々、外国から来られている方々も避難者役として、学生は患者役や、救護所運営、避難所運営にも参画しています。ペットを連れてきてくださった方もいて臨機応変に対応していました。管理栄養士や薬剤師などの専門職、地域の社会福祉法人の施設長や看護師の方々の参加もありました。

また、看護学部・看護学研究科は、災害に関して国内ばかりでなく、インドネシアやネパールなどの海外機関との交流も積極的に行っております。災害看護学を採求する研究についても活発に行われており、科学研究費を獲得して7件の研究、学内の戦略的研究経費を獲得して3件の研究がおこなわれています。本学会誌にも最近ではコンスタントに災害をテーマにした研究が発表され、本号でも2つの論文が掲載されています。

災害看護の歴史は長く、看護とともに常に存在し発展してきましたが、これまでの実践を、研究そして知識体系とを統合し、災害看護学として体系化するに至っています。1995年の阪神・淡路大震災や地下鉄サリン事件など未曾有の災害発生を契機に、1998年に日本災害看護学会が発足し、災害看護学を社会に対して可視化し、今やその存在はゆるぎなく発展しています。先に述べた看護学部の災害看護に関する実践、研究、教育は大きな災害看護学の流れの中で蓄積された知に基づいて活動し、そしてその活動を災害看護学の知へと還元しているとも言えます。合同災害訓練日には、十数年前を振り返り、実践の科学である看護学が知の連環の中で進歩してきていること、今日の活動が未来の看護学の発展につながっていくであろうことに感謝しつつ、慣れないトランシーバーに苦戦していました。

高知女子大学看護学会編集委員会の努力によって、第45巻は総説2論文、原著論文10論文、研究報告4論文を掲載することができました。学会員の皆様の研究活動の成果のみならず、博士論文、修士論文、卒業論文などの成果など多岐にわたって、興味深い論文が掲載されています。今後も、多くの卒業生や修了生が投稿しやすい学会誌となるように、努力を重ねて参りたいと思っています。